

学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業 実践記録

研究主題

読解力向上を目指した指導の工夫
～言語能力の向上に向けた学習の創造～

奈半利町立奈半利小学校

実践概要

本研究では、読解力を向上させるために対話を意識した授業づくりを行うとともに、単元構造図を作成することで学習過程を明確にしたり、読んだことを表現する場の設定をしたりする等の工夫を行った。これらの取組により、「児童の読みを鍛える」という目的を意識した授業づくりにつながった。

キーワード：単元構造図、言語活動の充実、図書館資料の活用、対話

1. 研究仮説

児童が「知りたい」「聞きたい」「伝えたい」と思えるような場面を設定するとともに、友達と学びを交流する機会を設定すれば、児童の「読み」は深まり、「読み」の力が向上するであろう。

2. 実践方法

- (1) 対話を意識した授業実践を行う。
- (2) 児童の知的好奇心を刺激する環境整備を行う。
- (3) 読んだことを表現する場を設定する。

3. 実践内容

(1) 学習過程を明確にした授業実践

単元など内容や時間のまとまりを通して、自分の思いや考えを深める学習が充実するようにした。児童が主体的に文章と向き合う中で自分の考えをつくり、友達と交流することで思考の過程をたどり、理解したり表現したりした言葉をどのように捉えたのか問い直すことで、理解し直したり表現し直したりする姿を目指した。

① 目指す授業の共有化

組織的な研究を進めていくためには教員の意識をそろえることが重要であると考えた。そこで、学習指導要領の趣旨を明らかにした上で、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業づくりの研修を行い、本研究への理解を図った。(写真1)

研修を通して、「対話をする前と後では何かが変わっていなければならない」ということが明らかになった。そこで、「意味のある対話の場面」を授業に位置付けることとし、そのためには、対話に臨む前に理由や根拠をもたせる手立てが必要であることを共通確認し、研究を進めていくこととした。



写真1：講師を招聘しての教員研修

② 学習過程を明確にするための単元構造図の作成

児童が見通しをもって学習活動を行うには、教師が単元の指導事項を踏まえた上で、児童の思考に沿った学習過程を構想することが大切である。

単元構造図は、授業者が考えている単元のねらいや教材観、中心となる問い等を整理し、指導内容や児童の思考の流れを明確に表すことができるものとなるようにした。(図1)

単元計画を立てるにあたっては、まず、学習指導要領解説で指導事項を確認し、単元の終わりに、児童はどのようなことができるようになってほしいのかを児童の具体的な姿でイメージした。その後、ゴールの姿から、そのような姿になるためには、一つ前の授業で何ができていないといけないのか、そのもう一つ前の授業ではどのようなことができる必要があるのかと、単元末の時間から順に考えていった。つまり、単元の終わりから単元構造図を作成していったのである。

公開授業研究会の研究協議においては、単元構造図を基にして、「めあては達成できたか」「効果的な対話ができていたか」「付けた力を付けるための手立ては有効だったか」の3点から2つを選んで協議し、授業を振り返った。(写真2)

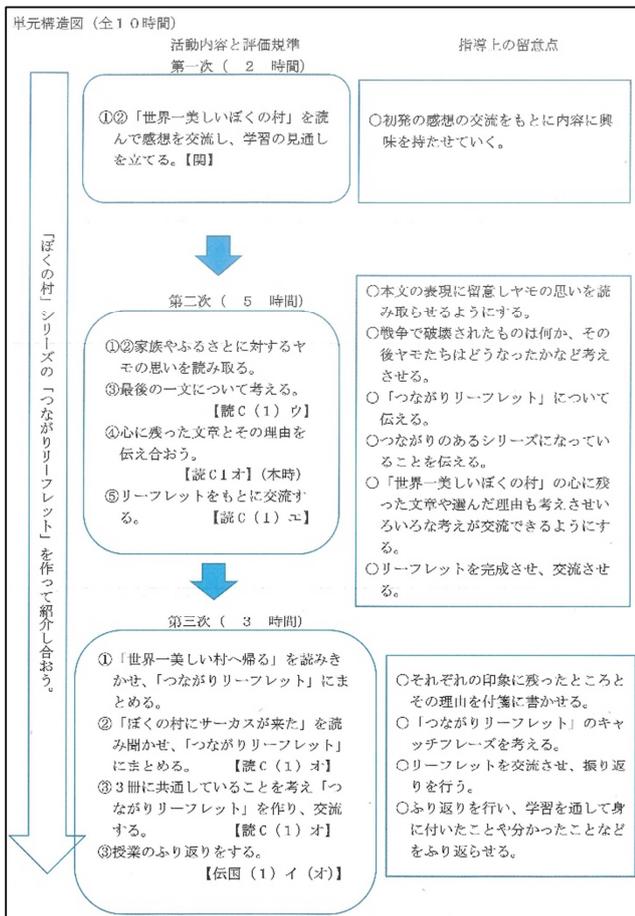


図1：学習過程を明確にするための単元構造図



写真2：授業後の協議で使用したシート

③学校図書館を活用した授業実践

「読むこと」の領域の単元では、全学年、第2次で教科書の教材文を使って学習し、第3次で図書館資料や新聞等を使った学習活動を行った。児童は、第2次で得た知識・技能を活用して課題を解決していくという単元計画で授業を行った。(写真3)特に、第3次では、図書館資料から得た情報や自分の感想・意見を、相手意識・目的意識をもって発信・交流するという対話の場を設定することを意識して取り組んだ。よりよい対話を生み出す教師の手立てとして、自分の思いや考えについて、根拠や理由を示しながら言わせること、児童が対話をする必要性を感じたり対話をしたくなったりする主発問を考えること、話型を示して対話を促していくことなどを行った。(写真4)

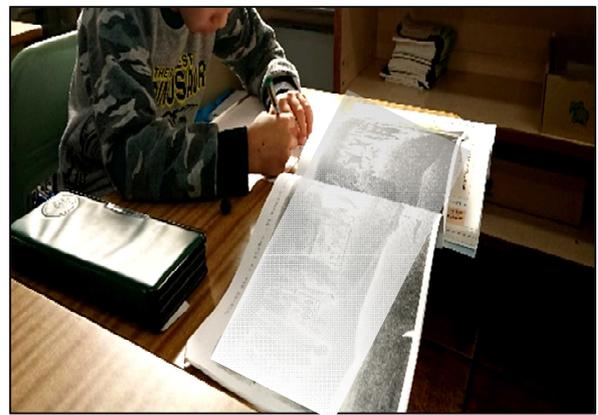


写真3：関連図書を活用して学習している様子



写真4：根拠となる文章に線を引いている様子

(2) 児童の知的好奇心を刺激する環境整備

新しい単元に入る前に、学校図書館や近隣図書館、オーテピアから集めておいた関連図書を教室に配置し、単元が終わるまで常設した。

①図書館の整備

本校の学校図書館は、「古い蔵書や修繕・補修が必要な本が多く、児童にとって魅力的な本が少ない」「配列が明確でないため、児童が目的の資料を探せない」「ぎっしりと並んだ本棚から本を取り出しにくい」「代本板がなかなか見つからず本を戻す際に時間がかかる」等の課題を抱えていた。そのため、学習に活用できる学校図書館となるように、児童の読書環境を整えることを主な目的として学校図書館を大規模改修した。(写真5)本棚にラベルを貼ることにより、配架が分かりやすくなり低学年の児童でも借りた本を簡単に棚に戻すことができるようになった。(写真6)さらに、本に親しむ姿がよく見られるようになった。(写真7)



写真5：開放感のある改修後の学校図書館



写真6：低学年児童にも分かりやすい配架



写真7：本に親しんでいる児童

②校内掲示

世の中で起きているニュースに興味や関心をもたせるために、教師が選んだ記事を切り抜き、コメントを添えて各学年の教室付近に掲示した。小さな文字を読みにくい1年生の教室近くには、昆虫や動物、魚等の写真が大きく写っている記事を、乗り物好きな児童が多い2年生の教室近くには、新幹線や電車の記事を、新聞を読むのを楽しみにしている児童が複数いる3年生の教室近くには、天気や地理等、地域に即した記事を、活発な児童が多い4年生の教室近くには説話的な記事を、学習が難しくなる5年生の教室近くには、職業や社会に関する記事を、俳句を作るのが得意な6年生の教室近くには、俳句や投稿の記事を掲示してきた。通りがかりの児童の目を引くように、コメントは短く、印象的なもの考えた。すると、新聞は難しく大人が読むものという概念が少しずつなくなり、新聞記事に興味を示す児童が増えてきた。

(3) 学びの共有

週に一度、新聞記事の切り抜きを行った。1～3年は選んだ理由や記事の感想を、4～6年は選んだ理由や記事の感想、要約を書き、廊下に掲示した。読書はがき新聞では、全学年、新聞形式の原稿用紙に読んだ本のあらすじや感想を書いた。また、おすすめの本と新聞記事について学期に一度、縦割り班で集まり、交流を行った。

「読む」という活動を通して得た自分の考えを交流することにより、認められたり学習意欲が増したりした。また、友達の新たな考え方に気が付いたり、これからの自分の学び

に見通しをもったりすることも可能となった。そこで、友達の学習の足跡から刺激を受け共に高まろうとする児童の姿を目指した。

①なはりっこ文学館

児童用玄関ホールに、国語科の学習の足跡を掲示する「なはりっこ文学館」を設けた。(写真8)

作品を見合うことで、児童や教師は、他の学年の学習内容や学習の仕方を知り、刺激を受け合っていた。特に教師にとっては、同じ教材文を使い、同じ指導事項を指導したとしても、様々な言語活動が考えられるということを実感する場となった。なはりっこ文学館に掲示された作品を見ることで、教師の言語活動のバリエーションが広がった。



写真8：児童の学習の足跡を展示した様子

②縦割りおすすめ読書タイム

読書することをインプットと捉えると、読んだ本について友達と話し合うことはアウトプットと捉えることができる。インプットするだけでなく、アウトプットすることにより、思考は整理され、深い学びにつながる。アウトプットすることを前提にすることで、インプットの質も高まると考え、縦割りおすすめ読書タイムを設定した。学期に一度、朝礼時に、これまでに読んだ本を一冊選んで持ち寄り、心に残ったところを伝え合った。また、班で選んだ1冊のおすすめの本をなはりっこ文学館に展示することにより、新たなジャンルの本を手にする児童の姿が見られた。(写真9)



写真9：なはりっこ文学館で本を手にする児童

また、本校の縦割りおすすめ読書タイムについては、高知新聞にも取り上げられた。
(写真 10)

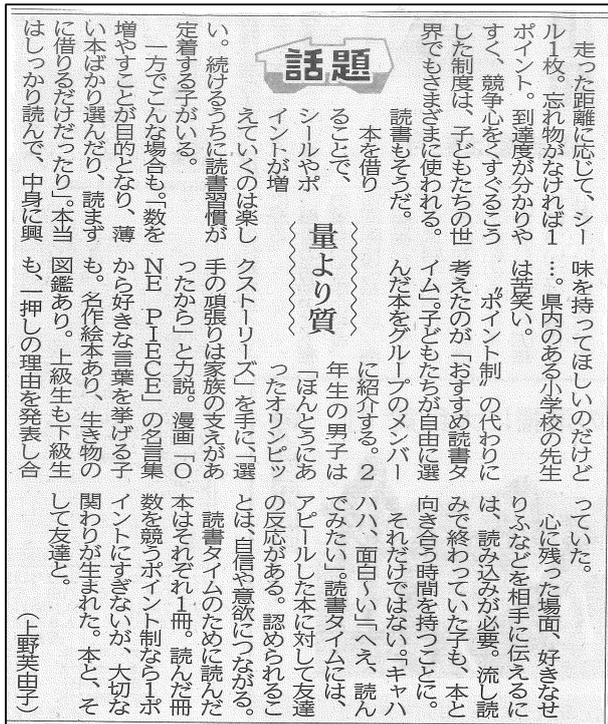


写真 10：令和 2 年 1 月 10 日 高知新聞朝刊

③縦割り新聞記事タイム

縦割りおすすめ読書タイムと同様の方法で行った。週に一度、切り抜いてスクラップしている記事の中から、一番心に残った記事を選び、班の中で発表した。そして、右隣の児童がその発表について感想を言い、最終的に班で一番のおすすめ記事を選んでやはりこ文学館に掲示した。班の代表の記事を選ぶという目的を設定したことで、縦割り班の中で対話が生まれ、選んだ理由を伝え合うことができた (写真 11)。



写真 11：縦割り新聞記事タイムの様子

④読書はがき新聞づくり

読書を苦手とする児童に本を手取るきっかけを与えたいと考え、読書はがき新聞づくりを設定した。1 学期は慣れるため、全学年、図鑑や自然科学分野から本を選んで大体的内容と感想を書いた。2 学期は全学年物語のあらすじと感想を、3 学期は国語科の年間指導計画と関連付けて、1～3 年は昔話、4～6 年は伝記についてのあらすじと感想を書

いた。全校児童の作品を階段踊り場に掲示することにより、読書が苦手な児童もよりよいものを作ろうとする態度が見られた。



写真 12：児童が書いた読書はがき新聞

(4) 成果と課題

指導事項を押さえ、学習過程を明確にした授業改善を行うことで、毎時間の授業について、目的とそれを達成するための手立てを考えながら授業づくりをすることができるようになってきた。また、対話の場を生む授業を心がけてきたことにより、児童は自分の意見を持ち、思考の過程を振り返ったり友達との意見の共通点や相違点に気付いたりできるようになってきた。また、読書を通して友達と交流する機会を設け、本の感想を伝え合うことの楽しさを体験したことで、以前より読書に親しむ児童も増えてきた。

しかし、一方では課題として、国語科の授業実践において、必然性のある対話の設定方法やより深まりのある対話にするための方策を研究していくことが挙げられる。「対話する前と後では何かが変わっていないといけない」が、まだ漫然と意見交流に参加している児童の姿を見る。そのため、対話により自分の考えや意見を伝え合うことで、児童の考えを広げたり深めたりする良さを実感させるような手立てを研究していきたい。また、「読み」の力については、高知県学力定着状況調査から、「叙述を基にして、登場人物の気持ちを捉える力」が十分ではないことが明らかになった。無解答率も高く、複数の場面の叙述を結び付けながら、気持ちの変化を見いだす力が不十分であると考えられる。今後、個別の支援をさらに工夫し、児童の実態に合った言語活動を設定し、継続的に取り組んでいくことが必要である。

【引用文献】

- 1) 文部科学省「小学校学習指導要領解説 国語編」2019 年 3 月
- 2) 高知新聞 令和 2 年 1 月 10 日朝刊「話題」